

# 西真寺通信

令和五年秋号 発行 西真寺

●西真寺第一駐車場ご利用について

前回ご案内した通り、旧縄のれん駐車場の売買契約が終了し、新たに第一駐車場として設けましたので、ご報告いたします。これに伴い、これまでの西真寺駐車場を第二駐車場とし、第一駐車場が埋まった場合、引き続きご利用いただけます。今後は、お盆やお彼岸のみならず、法事等で、どうぞご利用ください。

●浄土真宗本願寺派

新潟教区新潟組

親鸞聖人御誕生850年・

立教開宗800年慶讃法要の

ご案内

・日時 令和5年9月5日(火)  
・会場 新潟県民会館小ホール  
・内容 勤行 正信念仏偈  
作法第二種

・記念布教 清水正明 師

(布教使 与板組光源寺)

・記念行事 落語・太神楽曲芸

・入場無料

・落語 露の団姫 氏

(落語家・天台宗僧侶)

天台宗道心寺住職。兵庫県尼崎

市在住。高座の他にもテレビ・ラ

ジオで活躍中。小さい頃からの

「死」に対する恐怖をきっかけに

仏教を学びはじめ、高校在学中に

人生指針となる法華経に出会う。

落語家になるか尼さんになるか

悩む中、落語の創始者、初代・露

の五郎兵衛が僧侶であり、説法を

おもしろおかしく話したことが

落語の起源と知る。高校卒業を

機に初代・露の五郎兵衛の流れ

を汲む露の団四へ入門3年間の

内弟子修行を経て、主に古典落

語・自作の仏教落語に取り組ん

でいる。

・太神楽曲芸 豊来家大治朗氏

(太神楽曲芸師)

伊勢神宮熱田神宮に始まる太

神楽(だいかぐら)は厄払いの

獅子舞、縁起物の曲芸を中心に

演じられる400年以上の歴史

を持つ伝統芸能です。

豊来家大治朗は太神楽曲芸師

ラッキー幸治に師事し獅子舞、

曲芸、軽業を学びました。伝統

芸能に現代的な笑いを加えた舞

台は老人から子供まで楽しんで

いただけます。

また師匠より特別に伝授され

た曲芸「剣くぐり」は日本では

大治朗ただ一人の技です。尚、二人は内縁の夫婦です。

●親鸞聖人御誕生850年・

立教改宗800年慶讃法要団参

の報告

西真寺の代表として5月16日から2泊3日で、坊守と次男の光が本山に行って参りました。65人参加の2日目の夕食の際、光が乾杯の挨拶をしたそうです。また、坊守は、6月に本山にて得度の試験をクリア出来ました。私も、先に紹介した9月5日の新潟組主催の慶讃法要に出勤(お勤め)することになりました。二人に触発されながら、西真寺を代表して勤めて参ります。合掌



「私は神さまも信じていますが、それではいけないのですか」<sup>⑬</sup>  
・親鸞の神祇不拝から学ぶ戦争

## 6. 回向

人間は、「主体から客体」を経て、

「客体から主体」という投影のはたらきを繰り返し、自己を明らかにする過程を得ながら成長できる。これを示したのが、親鸞の「如来回向」です。回向とは、サンスクリット語でパリナーマナといい、

「転変すること」

「形を変えて現れること」

「あるものが熟して別のものに転ずる」

「識の転変」

「方向転換」（内容転換、振り替えること）を意味します。

主体から客体、客体から主体という「方向転換」によって「識の転変」が起こり、それまで客体であった如来は、法蔵菩薩に「形を変えて現れる」のです。そして、如来は法蔵菩薩の本願となって主体（私）を明らかにし、主体は信心を賜るのです。

主体から客体の方向性については、親鸞が出現するまでの回向の考え方で、客体から主体の方向性を如来回向として示したのが親鸞の革新性なのです。そして、両方向性にはたらく、信心をもたらず力を他力と呼んだのです。

哲学者の量義治は、「信を持たされる」ということは、阿弥陀仏が、その人にとともにあることである。一般的に言えば、**人間が持つ信とは、人間が絶対者と共にあるという意識**である。この意識はけっして対象意識ではない」と論じています。

量は、親鸞の信心もルター（キリスト教の宗教改革者）の信心も己による「信」ではなく、賜る「信」と説明しています。

また、西田幾多郎が、「もし対照的に仏を見るといふことならば、仏法は魔法である」と論じています。この指摘からも、対象を信ずる、すなわち主体から客体の方向性を否定していることが分かります。

つまり、親鸞は觀念の対象として阿弥陀仏を信仰しておらず、阿弥陀仏が、親鸞に信心を持たせ、おこしたものです。儒教、その流れを汲む神道の本質は、対象のみの志向性や信仰であることは明白です。

量や西田が、なぜ親鸞の信心について対象意識ではないと論じたかについては、往還回向にその理由が隠されています。

この往還回向の過程を経ると、人間が本来持っている理想的な人間像、つまり「聖なるもの」は単なる対象から象徴に変わり、この象徴がもたらすはたらきが浄土の世界観を起こします。

そして、念仏という身体性（身・口・意）を伴った表現力になります。そして、自らが持つ補償作用が中道をもたらすのです。

連続研修会では、この親鸞の革新性について、神道との違いに照らし「如来回向」として説明しました。しかし、あまり反応がありませんでした。そこで、親鸞の基本的な思想を取上げて説明させて頂いた訳です。

ここで疑問が生まれます。阿弥陀如来と人間が共にあるのなら、阿弥陀如来と人間は対等な関係にあるのかという、一体性に対する疑問です。

研修会では、会長の「我々人間は凡夫であり、凡夫は、阿弥陀如来に全てをお任せするだけで良いのではないだろうか？」という阿弥陀如来と人間である凡夫との一体性に対する疑問に対し、説明しなければなりません。

次の章では、凡夫と如来の一体性など、凡夫である以上おこがましいなどと、二分する世界を考える人に対し、不二かつ主体性の世界を説明したいと思います。

## 7. 機法一体

私がこの人間と神、凡夫と如来の関係性について説明した際、研修会会長は、全てを阿弥陀仏に委ねるのが凡夫であり、南無阿弥陀仏と、阿弥陀仏に全てをお任せするのが凡夫なのではないでしょうか？という疑問を私に投げかけました。この疑問は、阿弥陀仏を対照的に捉え、我々凡夫と二分する世界観を持ち、主体性がない考えのようにも受け取れます。

「機」は、衆生の信心を指し、「法」は衆生を救う本願のはたらきを示し、衆生の信心と仏法の教法がぴたり合うことは、南無（機）阿弥陀仏（法）が、名号として当てはまる。この論は、蓮如の機法一体論であり、お任せする信心、任せよ必ず助けるとした如来との「相反する相が一体となる目覚め」、二種深信を示していると考えられます。

石田慶和は、二種深信について、「親鸞の到達した究極的境地」『親鸞の思想』と述べています。また、二種深信は、鈴木大拙の「即非の論理」、西田幾多郎の「絶対矛盾的自己同一」小坂国継の「逆対応」（対立したものが対立したままで自己否定的に対応し合うパラドキシカルな関係）と同様に、宗教的体现の境地を示すものです。

蓮如が用いた機法一体論は、会長の言う通り、たのむ心（信心）を機としています。一方、蓮如以前の機法一体論は、浄土宗西山派善恵房証空上人や『安心決定鈔』（作者不明）にあります。ここでは衆生の往生と仏の正覚が一体不二であるという道理を示し、仏凡一体を表すものでありました。鈴木大拙は、この凡夫と如来の相の原理の一体性を説いており、蓮如の解釈とは異なります。

蓮如の思想は、キリスト教の正当派が神を無限に高い存在として位置付け、自らの神を自らの無意識の世界に追いやる関係に似ています。この人間と如来の関係は、人間が神を祀る信仰と同じ二分する世界観があります。

鈴木大拙はアメリカ人に対し、英語で真宗をアプローチする際に、仏教用語を出来るだけ使わずに一体性を説明しております。

アミダはホウ（法）であり、こちらの凡夫はキ（機）です。法と機は翻訳の非常に困難な言葉です。法はむこうにあり、機はこちらにあつて、宗教的教えは機と法が関係するところから出てきます。法は神もしくはキリストに相当すると考えてもいいでしょう。そして機はこの罪深い人間です。他力と自力は対象をなしており、浄土に生まれるためには、自力が去られ、他力が受け容れられねばなりません。（中略）ナムアミダブツと称えるとき、ナムは自力、機を

表わします。アミダは法、他力です。ナムアミダブツは、機と法、アミダと凡夫、自力と他力の合一ユニフィケーションを象徴しています。そしてそこでは娑婆と浄土も一つになります。だからナムアミダブツが称えられるとき、この句は二者の合一を象徴するのです。

一方、曾我量深によれば、「**法蔵比丘の御相がそのまま機法一体の御相**すがたであらせらるる」と述べています。

さらに、法蔵菩薩はさとりの世界からこの現実界へ還相回向された菩薩であるとして、「法界莊嚴によって衆生を攝取し、衆生を助けようという願を成就せんがために、法界から法蔵菩薩という位にさがってくれたのである」と還相回向を説明しています。つまり、機法一体、仏凡一体を象徴するのが法蔵菩薩である、ということになります。（次号に続く）



「葬儀や法事は何のためにするのですか」②

## 1. 法事について

法事とは、亡くなった人々の想いを聞いて往く、お浄土にいるその諸仏（おおいなるいのち）からの願いを受け止めて確かめ、相続して往くことです。

浄土真宗の聴聞の三次元として、第一に生前の故人の言葉を思い出してみてください。そして第二として、お浄土に生まれた故人の想いを想像してください。第三に、成仏した故人からの願いを思い起こしてください。この三つの過程について、法事を通して、亡き人と出遭い続ける場が創造されるのです。

また仏壇は、阿弥陀如来の世界観、浄土の世界を映す莊嚴を備えている「お内仏」を意味します。

諸派は、先祖棚（崇拜）を基にした「仏壇」です。しかし門徒は、阿弥陀仏の智慧の光に照らされ、護られるいのちの中心を「お内仏」といいます。この「お内仏」は、家族ひとりひとりのこころの拠り所であり、こころの中にはたらき続ける仏様を表現したものです。

## 2. 家族葬について

私たちは周りに迷惑をかけないで生きることが不可能な生きものです。もし、今まで周りの人に支えられて生きてこれたと思うのであれば、遺族が代わりになって、支えてもらった人たちに感謝の気持ちを伝える場が葬儀の場であるはずです。

もし家族に対して気を使っているならば、誰に対して気兼ねなく本音を話せるのでしょうか？また、身近な死から、自分の死後のことを誰に委ねられるのかを確かめる場も葬儀の場です。感謝の気持ちを伝える場、機会を放棄してしまう家族葬で本当によかったのか、再度考える必要があります。

もし孤立無援で誰にもお骨を拾ってもらえないのであれば、その為の阿弥陀仏であり、その為のお寺であります。世話になった親の葬儀にお金をかけられない事情がある場合は「家族葬」より、「寺院葬」をお勧めします。

3. 葬儀や法事をしないと罰が当たらぬのか？

葬儀と法事をしない人は、「死もまた我ら哉」という、人生における大切な自覚を深める機会がそこにあることが分かりません。親の死を通して自分の死を想像できない無自覚さが露呈するのです。死を他人事にして、自分の頭を下げる機会を持たない人間は、自己の驕慢さや自己中心の心を自覚する機会である仏縁を失います。結果的にその過程を罰と見做すのは、他者であり、頭を下げたことの無い本人は一生気づくことはないのです。

葬儀や法事は、社会的な対象喪

をつなぎ留める再生の場でもあるのです。竹橋太は、「儀式は、分離がもたらす、孤独感を癒し、満足感を与えるという役割を果たす」と述べています。亡き人の人間性を全て受け容れ、死を受け入れた人間こそが、自己の成長の節目に至る過程を得られると考えられます。

宗教社会学者 櫻井義秀は、「人は生きてきたように死んでいくものだといわれます。看取りの時間を豊かに持てた家族は、可能な範囲で相応の葬儀をもって故人を送るのではないのでしょうか。葬儀なしでは送れません。（中略）葬儀をやらずに、遺族は故人と結んできた感情の整理や、故人が生前に世の人々と結んできた関係を遺族につないでいけないでしょう。臨終行儀は当人の魂のためですが、葬儀は明らかに遺族とコミュニティのために執行されるのです」と、葬儀は故人の為ではなく、遺族とその関係性にある人々の為の儀式であることを指摘しています。

（次号に続く）